

ゴヤの生きたスペインは？

# 伝統と革新が交錯した時代、 そして戦争……

立石博高

東京外国語大学教授（スペイン史）

スペイン史の碩学P・ヴィラールが指摘するように、スペイン帝国の驕りの時代を描いた画家がベラスケスであるとするれば、旧体制の危機と崩壊の劇的な時代を描いた画家がゴヤである。

この天才の絵筆の対象は、自己を取り巻く社会状況の諸相に及んでいる。あるときは民衆の喜びや悲しみが、べつのときは宮廷人の優雅さや退廃が描かれている。またあるときは敬虔な宗教画が描かれ、べつのときには異端審問所や修道士たちが諷刺的に描かれている。したがって、ゴヤの作品をよりよく理解するためには、この激動の時代の歴史的特徴をつかむことが不可欠であろう。以下、簡単に粗描したい。

## 高まる 民衆の動き

ゴヤが生きた十八世紀半ばから十九世紀初めの時代は、まさに古いもの新しいもの、伝統と革新とが交錯しながら、封建的な体制が崩れ自由主義的

な体制が生まれようとする時代であった。彼が二十歳の誕生日を迎えようとする一週間前の一七六六年三月二十三日には、滞在していたマドリッドで激しい都市暴動（エスキラーチエ暴動）が起こっている。食糧の高騰と、ときの大蔵大臣エスキラーチエの進める服装取締令を含む強引な首都整備の方策に反発した住民が、王宮を取り囲み、食糧価格引き下げやエスキラーチエの罷免に成功したのである。これはスペイン絶対君主に対して民衆がその要求を飲ませることのできた初めての事件であり、以後のスペインの歴史は民衆の動きを捨象しては語れなくなっていく。

この数年前、英仏の七年戦争にフランス側に立って介入し、スペインは軍事的に手痛い敗北を喫していた。イギリスの進出に抗してこのまま広大なアメリカ植民地を維持していくのが困難なことは、誰の目にも明らかであった。対外的にも国内的にもスペインは王国改革を進める必要性があることを痛感

させられたのである。十八世紀後半のスペインもまた、ヨーロッパの後進国として、啓蒙思想の影響を受けながら「上からの改革」を行おうとする啓蒙改革の時代に入っていく。

ときの国王カルロス三世は、狩りを愛好し自ら政治に関わることの少ない君主であったが、すぐれた啓蒙改革派官僚を登用する術を知っていた。エスキラーチエ暴動のあと実権を握ったアランダ伯は、カンポマネス、オラビエラの協力を得て次々と重要な施策の実現にのりだした。守旧的貴族と結びつくイエズス会の国外追放が断行され、異端審問所の権限が縮小され、教会の土地財産を制限する動きも強まった。シエラ・モレーナ地域の開拓事業に着手し、各地に「祖国の友経済協会」を設けて啓蒙的知識・技術の普及が進められた。アメリカ植民地との貿易活発化のために、カデイスの貿易独占が廃止されて、本国と植民地の貿易自由化が実現した。農業保護・振興の方策も立

てられ、農業利害と対立する移動牧畜業者組合メスタの諸特権が削減された。

## カトリック的 啓蒙も頓挫

こうした啓蒙改革は、かつては自由主義・反聖職者主義と伝統主義・カトリック擁護の「二つのスペイン」の対抗として近現代の過程を描こうとした保守的歴史家たちによって、反教會的・反宗教的性格のものだと主張されていた。だが、最近では「カトリック的啓蒙」と称されるように、それは国王教権主義に立ちつつ、外見的・パロツク的な儀礼を廃して内面的信仰を重視した——したがって教会の華美、聖職者の墮落、民衆の迷信的帰依を鋭く批判した——ものだとして受けとめられている。ゴヤの宗教画のもつ敬虔さと異端審問所などへの辛辣な諷刺は、このカトリック的啓蒙の流れに位置するものである。

一七八八年カルロス三世が死去し、





行き場を失い、旧体制の秩序を批判する啓蒙は閉塞状態に陥った。カトリック的啓蒙が目指した教会の醇化も頓挫し、以後、教会批判は体制批判と同一視されてしまう。

ゴドイは、フランスと交戦するが敗れて一七九五年バーゼル条約を結び、その後はアメリカ植民地の保持を優先課題としてフランスと接近してイギリスと対抗する。ナポレオンとの同盟を重視するゴドイは、一八〇四年フランスの対英戦争に参加するが、翌年フランス・スペイン連合艦隊はトラファルガーの海戦で壊滅させられた。

### スペイン国内の混乱に乗じたナポレオン

凡庸な国王カルロス四世、身持ちの悪い王妃マリア・ルイーサ、寵愛を受け独裁政治を行うゴドイの三位一体は、スペイン国民の激しい反感を買うようになった。ゴドイは危機に瀕する国庫を救うために聖俗の貴族の特権を制限せざるを得ず、このことは伝統的特権階級を皇太子フェルナンド支持へと向かわせた。一八〇八年三月、守旧的貴族は、ゴドイに不満をもつ民衆を扇動してカルロスの退位とゴドイ失脚を勝ち取り、フェルナンド七世の即位に成功した（アランフェス暴動）。しかし、その数日後、身の安全を確保したカルロスはその譲位を撤回した。

一八〇七年のゴドイとの秘密条約でスペイン領内に兵を進めていたナポレオンは、こうしたスペイン国内の混乱

に乗じて、一八〇八年五月、父と息子をとともに退位させ、自分の兄ジョゼフをスペイン国王ホセ一世として即位させることに成功した。しかしながら、スペイン国民がすべてこの事態を諸々と受け入れたわけではなかった。啓蒙思想の影響を受けていた知識人は二つに分裂した。ナポレオンの圧倒的な力をまねにして、モラティン、カバルスらの親フランス派（アフランセサード）はその力を借りて遅れたスペインの近代化を行おうとした。ホベリヤノスらは、あらたな自由主義の世代とともに、フランス勢力に対抗しながら、スペインに立憲君主制を樹立しようとした。そしてモラティンともホベリヤノスとも親交のあったゴヤは、さしあたり政治的態度を表明せず、事態の推移を見守りながら戦争の残酷さを見据えていた。他方、伝統的貴族・聖職者も二つに分かれた。新王ホセ一世のもとで特権を維持しようとする者たちと、フランス勢力の侵略に抗しようとする者たちであった。

### 血生臭い戦いはゴヤの版画に

しかし、何よりも民衆が、自分たちの生活の場を蹂躪し、横暴に振る舞うフランス軍隊に反発した。最初の事件は、一八〇八年五月二日マドリッドの民衆による駐屯フランス部隊に対する蜂起であった。そしてこれに呼応するかのように各地の民衆は、旧体制への不満を抱きながらも、聖職者の説教に

唆されて、自分たちの生活、さらに生存までも危うくする侵略者、「不敬虔で無神論の」フランス勢力に対して戦ったのである（ゲリラ戦）。このスペイン独立戦争、すなわちフランス軍隊と「国王、宗教、祖国万歳！」を叫ぶ民衆との血生臭い戦いは、ゴヤの版画「戦争の惨禍」に冷徹に描かれている。

一八一四年、ナポレオン軍は敗退し、フェルナンド七世が国王復帰を果たす。絶対主義者の支持を受けた国王は、独立戦争のさなか自由主義者たちが制定したカデイス憲法（一八二二年憲法）を廃止し、スペインの近代化を望んだ自由主義勢力の努力は水泡に帰した。さらに、親フランス派だけではなく、自由主義者も弾圧し、異端審問所や封建的諸制度をすべて復活させてしまう。ゴヤは、自ら進んで愛国派たることを証明しようと、「五月二日」と「五月三日」の大作を描く。だが、フェルナンド七世の絶対主義体制のもと、宮廷から疎んじられることになった。

一八二〇年リエーゴを指導者とするプロシアンアミエント（クーデター宣言）が成功し、ふたたび自由主義者が権力を掌握、カデイス憲法を復活させた。しかしウィーン反動体制下の列強が武力干渉を行って、一八二三年自由主義政府は瓦解する。そして再度スペインはフェルナンド七世の反動的統治に苦しむことになる（「思むべき十年間」）。ゴヤは一八二四年祖国を離れ、そのまま戻ることなく、ポルドーで一八二八年に客死する。